匂宮の〈はは〉恋

――紫の上追慕と今上女一宮思慕との連関――

赤迫照子

はじめに

数多い『源氏物語』研究においても、個人としてはあまりとりあげられない匂宮について考えてみたい。これまで、薫の母恋については出生の問題と合わせて論じられてきた。[1] では、続篇のもう一人の主人公匂宮の恋のありようからは物語を展開させていく要素が見出せないのだろうか。

匂宮は父今上帝・母明石中宮に寵愛され世のおぼえ高く、次期春宮候補にも目されており、何一つ不自由しない立場にある。だが、匂宮はそれでも満足できずにさまよっているのではないだろうか。そしてこのことは匂宮に実母明石中宮・〈はは〉[2] 紫の上という二人の母親的存在がいることに起因していると稿者は考えている。それを考証していく第一歩として、本稿では匂宮と紫の上の関係に注目し、紫の上への思いが匂宮の行動にどのように作用しているのかを検討したい。

本文の引用は新潮日本古典集成に依ったが一部表記を私に改めた。なお、括弧内には巻数(ゴシック)と頁数を記した。

一　匂宮と〈はは〉紫の上

①三の宮は、あまたの御なかに、いとをかしげにてありきたまふを、御ここちの隙には、前にすゑたてまつりたまひて、人の聞かぬ間に、「まろがはべらざらむに、おぼし出でなむや」と聞こえたまへば、「いと恋しかりなむ。まろは、内裏の上よりも宮よりも、ははをこそまさりて思ひきこゆれば、おはせずは、ここちむつかしかりなむ」とて、目おしすりてまぎらはしたまへるさま、をかしければ、ほほゑみながら涙は落ちぬ。「大人になりたまひなば、ここに住みたまひて、この対の前なる紅梅と桜とは、花のをりをりに、心とどめてもて遊びたまへ。さるべからむをりは、仏にもたてまつりたまへ」と聞こえたまへば、うちうなづきて、御顔をまもりて、涙のおつべかめれば、立ちておはしぬ。取り分きておほしたててたてまつりたまへれば、この宮と姫宮とをぞ、見さしきこえたまはむこと、くちをしくあはれにおぼされける。

（御法　六・一〇九～一一〇）

匂宮は父今上帝・母明石中宮よりも〈はは〉紫の上を慕い、また紫の上の方もそんな匂宮を愛しく思う。両者の心の通い合いを読む側に印象づけている場面である。やがて紫の上が亡くなると、匂宮は「ははののたまひしかば」といって紅梅を愛で、桜の季節になれば

「まろが桜」を風から守ろうと思案する。確かに遺言通り、紫の上の紅梅と桜は匂宮へと譲り渡されたのであった。

紫の上の死後、塞ぎこんだ源氏はめったに誰とも会おうとしなかったが、匂宮だけは紫の上を偲ぶよすがとして側に置いて慈しむ。源氏は匂宮に亡き紫の上を見て心慰められているのである。匂宮と紫の上の絆の深さは源氏も認めるところであった。

このように正篇の終末部において匂宮と紫の上の絆が強調されて描かれている。これについて茅場康雄氏は、

主人公匂宮は血統からみれば源氏の孫にあたる。しかし血族であるというだけでは源氏物語における光源氏の後継者としての資格を持つことはできないだろう。そのためには源氏を継ぐ者としての確たる描出がなくてはならない。匂宮は紫の上に可愛がられたことにより源氏に愛されるのであり、この展開によって源氏の後継者としての資格が与えられている。つまり、紫の上を通して源氏の後継者の位置を獲得していると言えるのである。

と指摘する。[3] 匂宮は紫の上に鍾愛され、またそれ故に源氏から特別な愛情を注がれたからこそ、続篇の主人公たりえた。匂宮を造型するにおいて、紫の上との絆は重要なものであったはずなのだ。[4]

ところが続篇以降、匂宮が紫の上を回想する場面は全くみられなくなる。しかし続篇の冒頭匂兵部卿巻において「かの紫の御ありさまを心にしめつつ、よろづのことにつけて、思ひ出できこえたまはぬ時の間なし」（六・一六五）とあるように、都全体が紫の上追慕の雰囲気に覆われているその中で、匂宮が紫の上を忘れてしまったり、あまり思い出す機会をもたないとは考えにくいだろう。むしろ匂宮は「紫の上の、御心寄せことにはぐくみきこえたまひしゆゑ」（六・一六一）二条院に住んでいる位なのだから、世の人々の中でもとりわけ紫の上を忘れられずにいると見ることができよう。それは今上女一宮に関する叙述からもうかがえる。

②女一の宮は、六条の院南の町の東の対を、その世の御しつらひあらためずおはしまして、（紫ノ上ヲ）朝夕に恋ひしのびきこえたまふ。

（匂兵部卿　六・一六二）

今上女一宮は紫の上の遺邸六条院春の町の東の対に住んでおり、いまだに紫の上を恋い慕いながら暮らしている。ならば明言されてはおらずとも、二条院に住む匂宮の方も同様に紫の上を懐しみながら暮らしているとみるのが自然であろう。二人は幼い頃を共に過ごしたのだから紫の上の記憶を共有しているはずである。匂宮と今上女一宮はお互いを恋しい（はは）紫の上を偲ぶよすがとしあっているものと想像されるのだ。そんな二人が顔を合わせればどちらともなく三人で暮らした頃の思い出話が始まるだろうし、否応なく紫の上のいない空虚さが強く感じられてくるだろう。

以上のような匂兵部卿巻の記述から、匂宮の故紫の上に対する愛惜の情をうかがうことができる。しかしそれは露骨には語られておらず、匂宮が紫の上を追慕する姿は今上女一宮に投映されていると

考えられるのである。

二　紫の上と今上女一宮

続篇における匂宮と紫の上の関係を考える上で鍵となるのが、匂宮と共に紫の上に養育された今上女一宮である。ここでは今上女一宮と紫の上の関わりをみておきたい。

物語には今上女一宮が紫の上に養育された経緯についてはっきり記されていない。紫の上が養育させてくれるよう明石女御に頼んだのか、あるいは逆に明石女御の方が紫の上に依頼したのかは不明である。もしくは源氏が明石女御に対し、今上女一宮を紫の上に預けるよう指示したのかもしれない。若菜下巻、源氏は紫の上に対し、今上女一宮に内親王らしい心ばせをもたせるためには、まだ若く物事を十分わきまえない明石女御よりも、何一つ欠けた所のない紫の上が養育する方が望ましいと語っている。源氏は紫の上に今上女一宮の祖母格であり、かつ母代わりでもあり、さらには教育係であるよう求めたのであった。紫の上に養育された内親王ならば非の打ちどころのない内親王に成長するだろうと、読む側に想像させる。ここで今上女一宮は、理想的な内親王として造型されたのであった。[5]

さらに、今上女一宮は内親王という枠を越え、女性としても理想的な人物としてもかたどられている。夕霧巻、夕霧とのことで不本意な噂がたった落葉宮に同情した紫の上は、女の身の処し方について様々思いをめぐらす。皇女という地位にある落葉宮でさえも浮き名を流すことは妨ぎようがなかった。女にとって満足できる生き方とは何か。「わが心ながらも、よきほどにはいかで保つべきぞ、とおぼしめぐらすも、今はただ女一の宮の御ためなり」（六・六七）——紫の上の思いは全て今上女一宮の将来に収斂されていく。更衣腹の落葉宮と違い、后腹の第一内親王が誰かに婚す可能性はまずありえない。[6] 一生不婚を通すはずなのだ。紫の上もそれは心得ていたはずである。それでも紫の上が今上女一宮のために思いを廻らせるのは、紫の上自身、女が安心して幸せな一生を過ごすことの難しさを身をもって思い知らされていたからであった。

紫の上が自身の経験から今上女一宮に対し最良の教育をほどこしていたことは次からもうかがえる。

③対の上、かく年月に添へて、かたがたにまさりたまふ御おぼえに、わが身はただ一所の御もてなしに、人には劣らねど、あまり年積りなば、その御心ばへもつひにおとろへなむ、さらむ世を見果てぬさきに、心と背きにしがなと、たゆみなくおぼしわたれど、さかしきやうにやおぼさむとつつまれて、はかばかしくもえ聞こえたまはず。内裏の帝さへ、御心寄せことに聞こえたまへば、おろかに聞かれたてまつらむもいとほしくて、わたりたまふこと、やうやうひとしきやうになりゆく。さるべきこと、ことわりとは思ひながら、さればよとのみ、やすからずおぼされけれど、なほつれなく同じさまにて過ぐしたまふ。春宮の御さしつぎの女一の宮を、こなたに取り分きてかしづきたて

まつりたまふ。その御あつかひになむ、つれづれなる御夜がれのほどもなぐさめたまひける。いづれも分かず、うつくしくかなしと思ひきこえたまへり。（若菜下　五・一六一～一六二）

女三宮の降嫁以来、紫の上は夜離れの侘しさを味わうことになったが、今上女一宮をひきとり、その世話をすることで心が慰められるようになったとある。以前、朝顔巻で紫の上は、朝顔斎院を訪問するためにめかしこんだ源氏を見送る時、明石姫君の世話をしていた。この時の紫の上は女五宮の見舞いに行くと嘘をつく源氏に皮肉の一つも言っている。明石姫君の世話は嫉妬があからさまに態度に出ないようまぎらわすための所作だったのである。しかし、それに比べて若菜下巻の紫の上はただ耐え忍ぶだけであり、今上女一宮の世話は源氏のいないつれづれを慰めるものである。紫の上は我が身の不遇をかみしめながら今上女一宮の世話をしていた。

こうしてみると、紫の上の今上女一宮への教育には、紫の上自身の無念の思いが反映されているのがみてとれる。紫の上は今上女一宮が自分の思い描く理想的な生き方をするよう、祈りを込めて育てていた。正篇において今上女一宮は「紫の上を理想化した人物」として造型されているのである。

三　匂宮と今上女一宮

では、紫の上のイメージを色濃く背負う今上女一宮という存在は匂宮にとってどのような意味をもち、作用しているのだろうか。これについて注目すべきは、②で匂宮の視点から今上女一宮と紫の上が二重映しになるよう設定されていることである。「その世の御しつらひあらためず」とあるように、今でも六条院春の町東の対にはあたかも紫の上が生きて暮らしているかのような雰囲気が残されている。[7] そこに住む今上女一宮は擬似的な紫の上だといえようし、そうすると匂宮の中で（はは）紫の上と姉今上女一宮のイメージとがないまぜになっていると考えられるのである。

総角巻、宇治への禁足を命じられた匂宮が中の君に会えない寂しさをまぎらわそうと今上女一宮の許（ここでは六条院ではなく宮中の居所である）を訪れた場面では今上女一宮と紫の上の二重性がよく示されている。長くなるが、重要な箇所なので引用する。

④時雨いたくしてのどやかなる日、女一の宮の御方に参りたまへれば、御前に人多くもさぶらはず、しめやかに、御絵など御覧ずるほどなり。御几帳ばかり隔てて、御物語聞こえたまふ。限りもなくあてに気高きものから、なよびかにをかしき御けはひを、年ごろ二つなきものに思ひきこえたまひて、またこの御ありさまになずらふ人世にありなむや、冷泉院の姫宮ばかりこそ、御おぼえのほど、うちうちの御けはひも心にくく聞こゆれど、うち出でむかたもなくおぼしわたるに、かの山里人は、らうたげにあてなるかたの、劣りきこゆまじきぞかし、など、まづ思ひ出づるに、いとど恋しくて、なぐさめに、御絵どものあまた散りたるを見たまへば、をかしげなる女絵どもの、恋する男の

住ひなど描きまぜ、山里のをかしき家居など、心々に世のありさま描きたるを、よそへらるること多くて、御目とまりたまへば、すこし聞こえたまひて、かしこにたてまつらむ、とおぼす。在五が物語を描きて、妹に琴教えたる所の、「人の結ばむ」と言ひたるを見て、いかがおぼすらむ、すこし近く参り寄りたまひて、「いにしへの人も、さるべきほどは、隔てなくこそならはしてはべりけれ。いとうとうとしくのみもてなさせたまふこそ」と、忍びて聞こえたまへば、（今上女一宮八）いかなる絵にかとおぼすに、おし巻き寄せて、御前にさし入れたまへるを、うつぶして御覧ずる御髪のうちなびきて、こぼれ出でたるかたそばばかり、ほのかに見たてまつりたまふが、飽かずめでたく、すこしもの隔てたる人と思ひきこえたまひしかば、とおぼすに、忍びがたくて、

若草のね見むものとは思はねど
むすぼほれたるここちこそすれ

…《中略》…（今上女一宮八）ことしもこそあれ、うたてあやし、とおぼせば、ものものたまはず。ことわりにて、「うらなくものを」と言ひたる姫君も、されて憎くおぼさる。紫の上の、取り分きてこの二所をばならはしきこえたまひしかば、あまたの御なかに、隔てなく思ひかはしきこえたまへり。…《中略》…（匂宮ノ）御心のうつろひやすきは、めづらしき人々に、はかなくかたらひつきなどしたまひつつ、かのわたりをおぼし忘るるをりなきものから、おとづれたまはで日ごろ経ぬ。

（総角　七・八六～八八）

匂宮は今上女一宮から冷泉院女一宮・中の君を連想し、中の君への恋情抑え難くなる。そしてふと『伊勢物語』第四九段、兄妹の恋を描いた絵に目を止め、今上女一宮がせめて異腹であればいいのにと思い、恋の歌を詠みかける。[8] 匂宮の中で今上女一宮→冷泉院女一宮→中の君と思う対象は次々に連鎖していくが、結局それはただ循環しただけで、やり場のない情念は今上女一宮に向けられる。冷泉院女一宮・中の君と比較されることで匂宮にとっての今上女一宮の絶対性が再確認されるのである（後述するが、この箇所のように物語中、匂宮が今上女一宮をものさしにして冷泉院女一宮や宇治の中の君を評価する叙述がみられる。これは冷泉院女一宮や中の君があくまで今上女一宮に准ずる女性であったが故に、匂宮の恋の対象となったことを示唆していると考えられる）。ここで傍線部、この二人の仲の良さは共に紫の上の許で養育されたためだと唐突に説明がされているのは見逃せない。姉弟相姦の危うさを漂わせながら紫の上の影をちらつかせるこの叙述のありようには、匂宮の恋の基盤には（はは）紫の上を求める思いがあることがほのめかされている。匂宮にとって今上女一宮は紫の上の思い出を語り合える姉であると同時に、紫の上の代償でもあるのだ。

そうすると、次にあげた箇所、匂宮は二条院を居所とするはずなのに六条院によく居るかのように記されているという矛盾について

このように解釈することができるだろう。

⑤三条の宮焼けにし後は、（薫八）六条の院にぞうつろひたまへれば、近くては常に参りたまふ。宮もおぼすやうなる御ここちしたまへり。　（総角　七・四四）

この矛盾についてはこれまで薫の動向と関連づけた見解が出されてきたが[9]、匂宮側の問題として見れば、匂宮の今上女一宮の許――つまり紫の上生前のままにされている春の町の東の対――への頻繁な出入りをさりげなく匂わせたものと見ることができよう。匂宮が今上女一宮を慕う姿は何の前ぶれもなく④で突然現れたのではなく、それ以前の叙述からも読みとることができるのである。

四　匂宮の恋のかたち

ここまで、続篇において匂宮が紫の上を追慕していること、それと表裏一体に今上女一宮思慕があることを確認した。では、このような（はは）恋と姉思慕が匂宮の恋のありようにどのように関わっているのだろうか。

匂宮にとって最高の女性は今上女一宮である。その今上女一宮にひけをとらない女君が二人いる。一人は同じ内親王である冷泉院女一宮、もう一人は都的な美貌をもつ宇治の中の君である。

⑥宮は、さまざまに、をかしうもありぬべきわたりをばのたまひ寄りて、人の御けはひありさまをもけしきとりたまふ。わざと御心につけておぼすかたは、ことになかりけり。冷泉院の一の宮をぞ、さやうにても見たてまつらばや、かひありなむかし、とおぼしたるは、母女御もいと重く、心にくくものしたまふあたりにて、姫宮の御けはひ、げにいとありがたくすぐれて、よその聞こえもおはしますに、ましてすこし近くもさぶらひ馴れたる女房などの、くはしき御ありさまの、ことに触れて聞こえ伝ふるなどもあるに、いとど忍びがたくおぼすべかめり。

（匂兵部卿　六・一七二）

匂宮が冷泉院女一宮を求めた第一の理由はその身分の重々しさにあった。匂宮は冷泉院女一宮のその人ではなく、まず先に姫宮の母弘徽殿女御の身分・地位の重さに心惹かれている。匂宮にとって婚姻を結ぶのが可能であり、后腹今上女一宮に比肩する身分の女性は冷泉院女一宮しかいない。二人の女一宮はともに世間から尊敬を集める内親王であった。匂宮が冷泉院女一宮を憧憬したのは、今上女一宮の代わりにしたかったのではないだろうか（ところがなぜか冷泉院女一宮は物語から姿を消してしまう）[10]。

中の君の場合は、身分ではなく容貌の美しさのレベルにおいて今上女一宮に匹敵する女性であったために匂宮の愛情をうけたといえる。椎本巻末、薫は中の君と今上女一宮の類似を認めており、総角巻では匂宮自身が中の君と今上女一宮を比較している。

⑦山の端の光やうやう見ゆるに、女君の御容貌のまほにうつくしげにて、限りなくいつきすゑたらむ姫宮も、かばかりこそはおはすべかめれ、思ひなしの、わが方ざまのいといつくしきぞか

し、こまやかなるにほひなど、うちとけて見まほしう、なかなかなるここちす。　（総角　七・六六～六七）

匂宮はこの上なく大切にされる「姫宮」――婉曲に冷泉院女一宮を指すとみてよかろう[1]――もこの中の君程ではあるまい、身びいきで我が姉今上女一宮がひどくすばらしく見えるだけなのだと、宇治の風景にそぐわない中の君の美に驚く。④の匂宮の心中思惟においてもやはり中の君は今上女一宮に劣らないとされている。中の君は都の人間薫・匂宮に今上女一宮を連想させる女君なのである[2]。このようにみてみると、匂宮の姉宮を慕う思いは異性に対するものへと変奏し、姉宮に准ずる女君である冷泉院女一宮と中の君に向けられていると考えられる。

他にも、匂宮の今上女一宮思慕がまた違ったかたちで表出しているとうかがえる事実がある。それは匂宮の今上女一宮来訪についての叙述がみられるのが④明石中宮による中の君との逢瀬の禁止・浮舟の死（蜻蛉　八・一四二）といった傷心した時であるということである。これは匂宮が今上女一宮に癒しを求め、甘えている証拠としてうけとれよう。また、この時匂宮が今上女一宮の女房と戯れて気をまぎらわしているのは、無意識の内に女房を肉体的交渉が禁忌の姉宮の代わりとして見たてているからではないだろうか。つまり、匂宮はイメージ上の擬似的な姉弟相姦によって心を癒していると考えられるのである。もちろんこのような匂宮の行動の背後には（はは）紫の上を求める思いがある。

では、浮舟も今上女一宮へのやるせない思いをそらすための刹那的な欲望の吐け口の一人として位置づけられよう。浮舟巻、匂宮は浮舟に裳を着せて女房姿にし、「姫宮にこれをたてまつりたらば、いみじきものにしたまひてむかし」（八・五七）と思う。結局、浮舟は一時的に気をまぎらわすだけの今上女一宮の女房程度でしかなかったということになるのである。

結　び

以上、（はは）恋に突き動かされる匂宮のありようについて考察してきた。最後に匂宮と明石中宮との関係について言及しておきたい。

匂宮自身が「親の飼う子」（浮舟　八・五九）と嘆く通り、匂宮は明石中宮に監視・規制されて「汲々とせざるをえない[3]」状況下にある。明石中宮は匂宮が二条院ばかりで暮らしたり、身分にふさわしからぬ行動をとるのを諫める。また、宇治への禁足を命じ、六の君との結婚を押し進める。明石中宮自身が意識するしないは関係なく、（明石中宮）という存在は匂宮を手元（つまり都の中心）に縛りつけようとしているのである[4]。東屋巻、浮舟から匂宮をひき離したのは明石中宮の病の知らせだし、入水後の浮舟の消息は明石中宮の判断によって匂宮には知らされなかった。

明石中宮が匂宮に心の安らぎを与えてくれる母として設定されていないのは明らかであろう。では（明石中宮）が匂宮の紫の上追慕

に必然性をもたせている、もしくは拍車をかけており、そしてこのことは今上女一宮思慕と連動していると見ることができるのかもしれない。不性行な弟匂宮をかばい、明石中宮にとりなすのは匂宮の良き理解者今上女一宮のはずである。

匂宮と明石中宮の母子関係についてはより詳細に検討する必要があろう。また、このように匂宮に明石中宮・紫の上という母親的存在が二人いることは、薫に源氏・柏木という父が二人いるのとパラレルになっている。鏡像関係にあるとされる薫の恋のありかたと絡め合わせて物語を読んでいくことが可能か否かといった課題も残したが、これらについては稿を改めたい。

〔注〕

(1) 吉井美弥子氏「薫と〈女三の宮〉――源氏物語第三部の一断面――」(『国文学研究』第一〇〇集　平2・2　早稲田大学国文学会)、原陽子氏「薫の恋を支えるもの――母思慕と潜在する父恋――」(『源氏物語と平安文学』四　平7　早稲田大学出版部)、小林正明氏「逆光の光源氏」(『王朝の性と身体』叢書・文化学の越境1　平8　森話社)。

(2) 「はは」とは母・祖母どちらを指すのかは明らかでない。本稿では匂宮にとって紫の上が明石中宮と同格あるいはそれ以上の意味をもっていることが重要なのであり、「はは」が母・祖母どちらを指すのかは問題にはしない。

(3) 茅場康雄氏「薫と匂宮――光源氏生前の叙述より――」(『平安文学研究』第66輯　昭56・11)。

(4) 稲賀敬二氏「匂宮」(『国文学　解釈と鑑賞』昭46・5　至文堂)では「紫の上からとくに鍾愛される」ことは「だだっ子のお坊っちゃん的性格」、「匂宮と薫を対照させる視点」と同じく「匂宮の属性」とする。また、甲斐睦朗氏「源氏物語の人物把握の一方法――匂宮の人間像を中心に――」(『中古文学』第7号　昭46・3)は匂宮が紫の上に養育されたことは、匂宮の「生来の明朗さと行動性」が六条院で「伸び伸びと育」まれたこと、そして「〈女三宮―薫君〉の系列に対峙するものとして〈紫の上―匂宮〉」が設定されたことを意味しているとする。

(5) 今上女一宮が理想的な内親王として造型されたことの意味は、もちろん、薫の側の対今上女一宮意識の問題としても関わってくる。

(6) 当時后腹の内親王で結婚した例としては醍醐天皇の中宮穏子腹の康子内親王がいるが、師輔との結婚は私通であり、正式な降嫁とは見なし難い。『源氏物語』では、左大臣に婚した大宮がいる。ただしこれは政治的理由が背景にあったという今井久代氏「皇女の結婚――女三宮降嫁のよびさますもの――」(『むらさき』第26輯　平1・7　武蔵野書院)の見解が提出されている。これらを考えあわせても、今上女一宮が入内・降嫁する必要がないことは明らかであろう。帝位は兄弟が継承していく

し、有力な後見にも囲まれており安定した暮らしを送れることが約束されている。また、政治的な理由で降嫁する必要もない。

(7) 明石一族に占居されつくしたかのようにも見える六条院の中でも、核となる春の町東の対が紫の上生前のままにあることは留意されよう。

(8) この場面に注目したものとしては、管見によると助川幸逸郎氏「宇治大君と〈女一宮〉――〈妹恋〉の論理を手がかりとして――」(『中古文学』第61号　平10・5)が唯一であるが、氏の論では特に匂宮側の問題として論じられてはいない。

(9) 注(1)吉井論文、注(8)助川論文、三田村雅子氏「〈邸〉の変転」(『源氏物語の思惟と表現』平9　新典社)等。また、助川論文は「匂宮の今上女一宮への疑似(妹恋)が、薫の大君に対する疑似(妹恋)」と並べられていると指摘する。薫は弁の君に対し、

ただかやうにもの隔てて、こと残いたるさまならず、さし向ひて、とやかくに定めなき世の物語を、隔てなく聞こえて、つつみたまふ御心の隈残らずもてなしたまはむなむ、はらからなどのさやうにむつましきほどなるもなくて、いとさうざうしくなむ、世の中の思ふことの、あはれにも、をかしくも、愁はしくも、時につけたるありさまを、心に籠めてのみ過ぐる身なれば、さすがにたつきなくおぼゆるに、うとましかるまじく頼みきこゆる。

(総角巻　七・一七～一八)

と、私には仲の良い「はらから」はいないから大君を得たいと述べている。薫がいう自身と「はらから」との関係とは、具体的には匂宮と今上女一宮の姉弟関係をイメージしていよう。三条宮の焼亡に伴う六条院移居によって、薫が匂宮と今上女一宮の仲の良さを実感する機会は増えたはずである。では、匂宮に対する羨望の思いが薫の「自分にも打ちとけて話せる「はらから」が欲しい」という欲望を刺激し、大君思慕へと向かわせる一因となったのではないだろうか。

(10) 注(8)助川論文。

(11) この「姫宮」について、例えば「新日本古典文学大系」「新潮日本古典集成」は皇女一般を、「新編日本古典文学全集」では今上女一宮を指すとする。だが、匂宮が「かばかりこそはおはすべかめれ」とその美貌を推量する「姫宮」といえば具体的には冷泉院女一宮しかおるまい。

(12) 中の君が都的な女君であることについては藤本勝義氏「宇治中君造型論――古代文学に於けるヒロインの系譜――」(『国語と国文学』昭55・1)に指摘がある。

(13) 神田龍身氏「橋姫」(『新・源氏物語必携』學燈社　平9)

(14) このような匂宮と〈明石中宮〉の関係は、注(1)吉井論文にある薫と〈女三宮〉の関係と全く同じである。

――あかさこ・しょうこ、広島大学大学院博士課程後期在学――